

東京空襲犠牲者の叫び

せめて名前だけでも

●〈ひろば〉東日本大震災と東京大空襲66年、私たちが思うこと。●第11回東京空襲犠牲者遺族会総会●全国空襲被害者連絡協議会（全国空襲連）結成1周年のつどい—差別なき戦後補償を求めて●「空襲被害者援護法（仮称）」骨子素案●〈街の動き〉★浅見洋子詩集『独りぼっちの人生—東京大空襲により心を壊された子たち★『続 表参道が燃えた日—山の手大空襲の体験記』

第30号

2011. 9. 15.

編集発行 東京空襲犠牲者遺族会

事務局 東京都墨田区押上1-33-4-102

tel/fax 03-3616-2338

tokyokusyuizokukai@ybb.ne.jp

東京大空襲訴訟控訴審、11月28日に最終弁論 大阪空襲訴訟、12月7日に大阪地裁で判決

空襲被害者等援護法（仮称）を実現する議員連盟を設立

○東日本大震災から5カ月、今年の夏はことのほかの酷暑でしたが、8月6日の広島、9日の長崎と平和式典が盛大に開かれ、広島市長、長崎市長の平和宣言が読み上げられ、NHKから中継で放映されました。東京には、こうした式典を開く平和公園がないことを改めて痛感させられました。

○7月18日、日比谷公会堂で「2011非核・平和をうたうつどい」に1700人が参加しました。

「原爆の火」を灯し続ける人々の呼びかけで、東京空襲遺族会、広島・長崎の被爆者（東友会）、沖縄戦犠牲者、中国残留日本人孤児などの反核、平和を願う市民団体が実行委員会をつくり、戦争による民間人犠牲者が一堂に集まった初めての集会でした。原告団の豊村美恵子さん、清岡美知子さん、榎本喜久治さんが空襲の体験を朗読し、全国400市町村の民間人死没者、傷害者、孤児らに差別なき補償を、そのための共同の闘いと呼びかけました。

○6月15日に衆議院第1議員会館で超党派の衆参両院国会議員36名（秘書、代理を含む）が出席し、「空襲被害者等援護法（仮称）」を実現する議員連盟」の設立総会が開かれました。衆議院法制局の担当者から「援護法」案が説明され、出席各議員から決意の表明がありました。会長には、首藤信彦（民主）、副会長に柿沢未途（みんな）、笠井

亮（共産）、服部良一（社民）、事務局長に高井崇志（民主）の各議員が選出されました。後日、公明党の赤松正雄氏が副会長に就任しました。また、自民党や各会派の議員にもさらに要請していくことが確認されました。

○7月11日、東京高裁で第5回口頭弁論が開かれ、弁護団より学習院大学、青井志帆教授と全国戦災被害者連絡会、杉山千佐子会長の証人採用の必要性を強く訴えましたが、裁判所はこれを認めず、11月28日に最終弁論が行われ、結審することが決まりました。判決は来春にもある見込みです。

○同日、大阪空襲訴訟の最終弁論が開かれ、大阪地裁の判決は12月7日に言い渡されることが決まりました。

○8月14日、「全国空襲被害者連絡協議会（全国空襲連）結成1周年のつどい」が江戸東京博物館ホールで開催され、6月15日に設立された「空襲被害者等援護法（仮称）」を実現する議員連盟の各党代表の国会議員の決意表明、参加団体、支援者らの激励の言葉、早乙女勝元、中山武敏、前田哲彦、斎藤貴男、黒岩哲彦各氏によるリレートーク、主催者を代表しての杉山千佐子、安野輝子氏のあいさつ、足立史郎事務局長の報告などがありました。

10月23日（日）第6回浅草ウォークにご参加下さい！

〈ひろば〉東日本大震災と東京大空襲66年

私たちが今、思うこと

(原稿をお寄せください。800字以内)

古今東西感じ入って候 北海道千歳市 市川 勇

今年4月、私は四国八十八所巡拝5回目が終わりに、結願することが出来た。巡拝した村々で目にしたのは、2米以上もある「〇〇一等兵慰霊碑」など刻まれた慰霊碑である。多い所では10ヶ所以上もあり、太平洋戦争で沢山の若者が命を失ったことが偲ばれて、胸が痛む思いを幾度もした。

東京は人口が多く沢山の兵士が出征し犠牲になったが、慰霊碑などは余り見掛けない(郊外や農村部は別だと思う)。別の見方をすれば、軍人・軍属の戦死者に対する遺族年金は充分に支給され、生活苦者は少ないのだろう。又年金を受け取るべき家族の多くは、大空襲で戦死されたのでは?と思ったりする。東京大空襲で被災した一般市民には何の補償も無いままである。当時の法律では人災に対しては国が補償すると明記されているのである。

東京大空襲を始め、戦争で両親を失い孤児となった子供達には、何の支援もなく、翌日からの生活苦に物心共に深く傷を負ったのだ。私も大空襲で両親を一夜で失い苦しい日々を過ごした。当時子供だった人々はどんな人生を送ったのかと思うと、遣り切れない思いだ。今回の3・11東日本大震災で多くの人が犠牲になられた。その中で菅首相は「両親を失った子供達の将来は国家が責任を持つ」と保障された。私はその言葉を聞いて感動し、涙を流した。

第二次大戦も福島原発事故も人災である。第二次大戦後、ドイツは国を復興させながら兵士・市民の区

別なく犠牲者に補償を行ったと聞く。比べて我が国日本は、「一億総懺悔」などと言い、開戦の総括もせずに60余年を過ごして来た。本当にこのままで良いのであろうか。アメリカから貰った民主主義も、言論の自由も危うくなって来たように思うのだ。私達は、あの戦災の焼野原から立ち上がり、生きて来た。新しい、自由な、民主的な国にと努力した。再びの戦災死者を出さぬためにも、昔を知る遺族会の皆さん、我々は、将来に向かって力の限り頑張ります。

1945・3・10と2011・3・11のちがいはあるのか

新井英吉

3月11日の大災害では、ご心配をおかけしました。星野団長さんからは見舞いの電話をいただきました。ありがとうございます。拙宅は海沿いの津波被災地から遠く離れていて難を逃れました。遺族会でも何かの方の消息が不明とのことですが、ただ無事を祈るばかりです。1945年3月10日、東京大空襲のときも私たち母子4人は疎開をしないで無事でしたが、東京にひとり残った父が惨死しました。

3・10と3・11の間には66年の隔たりがありますが、その視覚的な現象から連想して、思いを述べられる人もいます。本質的なところでは、どのようにつながるのでしょうか。3・10はその前後の戦禍(そして敗戦)、3・11も原発破局というそれぞれ大きな負債も負っていて、事柄の本質に迫るには、何に目

を向けたらよいのでしょうか。

私は3・10は疎開をしていて、直接その地獄図絵をみておりませんし、3・11のときも大津波に追われてはいません。原発暴走では放射能の被害を(程度はわかりませんが)受けてはいても、それは恐らく東京の人々と大きく違いはしないでしょう。ですから、身をもって体験した方たちとは物の見方が違うと思いますが、3・10と3・11の現象面だけではなく、66年を隔てて人間あるいは社会の行動や考えにどのような共通性・違いがあるかを考えることも、無駄ではないのではないのでしょうか。

価値観を根底からひっくり返されたはずの8月15日も、まためぐります。多くの課題を抱えたまま、震災からも5ヶ月が過ぎようとしています。

私には、当地は近頃、何やら浮足立ったような、少々はしゃぎ過ぎの感じも受けています。この先、どのような移り変わりをしていくのでしょうか。(2011年7月・仙台にて)

原発事故に思う

河合節子

私達は、戦中戦後の時代を一生懸命生きてきました。どうして大人達はあんな馬鹿な戦争に加担してしまったのかと問えば、答えは「そういう時代だったのだ」「流れに逆らうことは出来なかった」「軍部や政治家や報道にだまされた」と。戦争が終わって国民は「もう絶対に戦争はしない」「もう誰にも騙されない」と心に誓いました。しかし、悲惨な戦争の話は語りたくないし、傷付いた心をさらしたくない。一方、戦後生まれは辛い話、貧乏くさい話は聞きたくない。近頃は、アメリカと戦争したことさえ知らない人もいます。反戦の思いが伝わらない。

今年3月11日、大震災と原発事故が起きました。

震災は天災ですが、原発事故は人災です。唯一の被爆国でありながら、いつでも原爆に移行出来る放射能物質を保持し続け、その恩恵に与することに、私は違和感を持ちつつも、署名に名を連ねるくらいがせいぜいでした。日々、電気は使います。そして「技術大国日本」「原発安全神話」は、いつの間にか私の中に喰い込んでいました。大急ぎで原発の勉強をしました。今、現に起こっている重大事故は、前々から警告されていたのです。これらの本の著者は、どんなに口惜しい気持ちでしょう。これらの著者を潰そうとする記事が早くも出ています。

私達の子や孫は、放射能と戦いつつ、生きていかねばなりません。子や孫に絶対、戦争を味わわせてはならないと願って来たのに、こんな時代を引継がせることになるなんて！ 私達は、また騙されてしまった。政治、財界、マスコミ、そして騙され易い国民。これからの一日一日をどうやって生きて行きますでしょうか。

『せめて名前だけでも』10年で30号 宮崎さと子

私は『豊島区交流会』を6号で載せていただいた宮崎です。終戦後66年を迎えましたが、私にとつてはついこの間のことのようによく覚えております。当時池袋1丁目に家族7人で住んでいましたが、昭和20年4月13日未明に空襲があり、警報と同時に近くの大きな防空壕の奥の方に逃げ込みました。しばらくすると、外から「逃げろ」の声が聞こえ、皆でやっとの思いで外に出たのですが、すでに火の海でどうしていいか分かりませんでした。その時弟をおぶった私に、母が防火用水の水をバケツで2、3回

掛けてくれましたが、それが終わらないうちに私は人に押されて、振り向きもせず火で覆われている大通り（現サンシャイン付近）へ逃げていきました。

今でもその時にどうして母達に声を掛けなかったのか、どうして後ろを振り返らなかったのかを、とても残念に思い、後悔しています。母と妹3人はどこに行ったのか分かりません。朝になって、まだ燃えている家の方へ帰り、父に会いました。父は山手線の線路のドブの中で、トタンをかぶり朝までいたそうです。私は父に弟を渡したのは覚えていますが、その後はわかりません。気がついた時は病院の先生の前で防空頭巾が燃えて、弟は頭・手足にヤケドをしました。私は手袋をしていなかったので両手にヤケドをしています。現在もキズは、薄くはなりましたが、残っています。それはそれは、精神的苦痛は大変でしたが、弟は一言も云った事はありません。

現在、私は子ども3人、孫7人、ひ孫1人で計16人、弟は子ども3人、孫3人で計11人、合計27人の大家族となりました。戦争がなかったら、空襲がなかったらと思うばかりです。私は現在80歳となり、弟は72歳となり、幸福に暮らしている事を母達に報告することを楽しみに、あと何年か生きていたいと思っております。今一番良くしてくれるのは弟です。

母たち4人は敵機の焼夷弾で死亡！ 松田エイ子

私は昭和20年3月10日の空襲で母と姉・兄・妹を亡くしました。遺骨も何も有りません。当時浅草区寿町1丁目16番地に住んでいました。11歳の時9歳の弟と埼玉の親戚に疎開をしていました。10日の夜、伯父に起こされ外に出ると、東京の空が真っ赤に燃

えている炎で昼間のように明るく、低空で飛ぶ飛行機まで見えたので、それから家族のことが心配で眠れませんでした。翌日も空が煙で薄暗く曇っていたのが忘れられません。数日後、父だけ帰ってききました。その時の話で、先に母と姉妹が逃げ、兄は火を消してからと後に残り、先に出た父は、蔵前の方に行く事になっていましたが、火の勢いがすごくて行かれず、厩橋の上で助かったそうです。それ以来一言も空襲の話はしませんでした。

その後の生活は苦しく、農業の手伝いなどをして、お米や野菜を分けてもらい大変でした。それから、22年の秋には台風で堤防が決壊し、洪水で建てたばかりの家が流失してしまい、進学も諦め、農家に住み込みで働きに行きましたが、慣れない仕事で体を悪くして家に戻り、次に東京の洋服屋さんに就職が決まり住み込みで働きました。仕事は楽ではありませんでしたが、おかみさんが空襲で弟2人を亡くしていた人だったので、何かと気に掛けていただき、気持ちの安らぎを得ました。休日には慰霊堂に行き、遺骨が有るかも知れないと思ったりもしました。25歳で結婚をして、48歳の時主人が急死したため、仕事を続けていましたが、新聞で提訴のを知り、2次の原告団に加えていただきました。その時取り寄せた戸籍謄本を見て始めて知ったのですが、母達4人「浅草蔵前3丁目4番地において敵機の焼夷弾により死亡」「蔵前警察署長報告」と書いてありました。兄に関しては後から逃げたのに、適当な記述が悔しいと思いました。

長年耐えてきたことを思うと、一日も早く立法院による援護法が出来て頂きたい事と、裁判の結果が良い方向に進んでくれますように、祈るばかりです。

今、思っていること

高松 薫

戦争とは何だ。人が人を殺すのは、平時なら極刑になる。殺された方の親族の悲しみを大切に考えるようにならなければ、問題の解決にならない。

日本は、国連の平和維持活動に参加しなくてはと思う。敗戦後、明治憲法を破棄して、平和憲法になった。湾岸戦争の時、インド洋でアメリカ軍に給油をした。自衛隊がイラクに駐屯して、後方活動に協力した。アメリカの傘の下で安全が保たれている感じであるが、独立国としてはダメ。平和活動を実践して友好国を増やしていかなければいけない。

日本の食糧自給は50%以下で、輸入なしには生きていけない。資材を輸入して、自動車・家電などを製作し、輸出して生活している。1930年ごろの不況で、関東軍の独走により、「満州」中国へと戦争を拡大していった政府に怒りを感じる。被害を被った方々に心より申し訳なく思う。補償を勝ち取るまで、頑張りましょう。当時は御前会議といって天皇陛下を入れて、少人数で重要なことを決めていた。しかも秘密裏に行われていた。国民は「カヤの外」だった。第2次世界大戦も、そのように決められた。当時の世論調査によると、日米開戦に反対は60%あったと伝えられている。

国を司る人は選挙によって代表となる。もっとも重要なことは国民投票で決めるような、透明性が必要だと思う。今の飾り天皇制に反対。首相も国民投票で決めるべきだと思う。

東京大空襲をはじめ、度重なる全国の空襲で、膨大な人が被害を受けた。「雇用関係がない」と打ち捨て、軍人には50兆円に及ぶ補償が続いている。このままでは、軍人国家になっていくと思う。

震災・被災そして私 12首

三須以久代

震災忌すぎて一日をおく地震が襲う津波に消ゆる集落

震災におきし津波と震災の夜の火の速さ告ぐ友は電話に

津波よす速さと震災の夜の火の速さ半世紀すぐるも恐れは消えず

核のこと気がかりつつゆく風の寺杉の落葉は音たてず積む

消えざりし想いの中の弟は幾年経ても六年生のまま

ほおづきの赤くなる日よ帰らざる妹が穿きゆきし下駄の緒の色

楽しげに人等踊れる輪の中に亡き幼な日の弟妹もいて

逝きしものともらう為に生かさるる吾と置いて養ういのち

わが負えるさだめ共々踏み来し黒きヒールは捨てざりしまま

花芽ふく花のいのちの中に入る一人の心潤さんため

ヒマラヤ杉落葉するとき一瞬の光の筋を吾にほどこす

氷雨ふる八幡坂の土佐みずき露を連ねて黄に咲きけぶる

私の中の空襲

榎本喜久治

昭和20年5月17日、一発の爆弾が、母子の命を奪った。疎開した家から6軒離れた農家である。名古屋市のすぐ南（現、東海市）にあるため、B29機は、町の上空を、群れをなしていく。町は全く無視されていた。落とされたのは、捨て爆弾だろうか。現場には行けなかったが、私の「空襲初体験」になった。

空襲遺族会の初めのころ、名古屋市で会があり、一日、東海市を訪れた。市役所で市史を閲覧したが、記述がない。図書館にも、無いという。卒業した学校を訪ね、校長と懇談したら、「古老から聞いたことがある」。たまたま出会った市議会議員に話すと、「始めて聞いた話だ」

あのとき、2人が殺されたのは幻だったのか。でも、私の心の中に基底となって残った。（3月10日の亀戸や家族のことを聞くことができたのは、10年前でした）。

数年前、たまたま買った古本を読んでいると、上野町（疎開先）が被災したこと、東海市で3人犠牲になった記載を発見。幻ではなかった。

私にとっては、犠牲になったことさえ抹殺されてきた2人が、十万人に匹敵する重さで、私の中にいる。本の名は『日本列島空襲戦災誌』（水谷鋼一著）。

〈東京・大阪・重慶〉

3 都空襲裁判 原告・支援者の交流

フォトジャーナリスト 鈴木賢士

東京空襲の被害者・遺族の皆さんは、東京と平行して大阪、重慶でも空襲裁判が進行していることは、ご存知だと思います。今回は、昨年12月に重慶を訪問した際、大阪の原告代表が重慶の原告団と交流したことを中心に報告することにします。

2010年の暮れ、上海乗り継ぎで訪れた中国西南部の重慶は、林立する高層ビルが、別名「霧都」の名の通り深い霧につつまれていました。長江（揚子江）と嘉陵江にはさまれた高台の半島、ここが中国で最大の面積・人口を擁する中央の直轄市、重慶の中心部です。4回目になる重慶取材は、一瀬敬一郎弁護士と「重慶大爆撃の被害者と連帯する会・東京」のメンバーと一緒にしました。今回初めて服部良一衆議院議員（社民）が加わりました。

日本の国会議員が空襲被災地を訪れたことで、現地の対応も少し変わりました。会議には重慶市の人民代表大会委員なども参加し、民間交流を一步踏み出した感じですが、さらに注目されるのが、大阪空襲の原告・支援者の同行です。一行が繁華街の中心地にある重慶大爆撃訴訟原告団の事務所を訪ねたとき、部屋を埋め尽くした70余人に盛大な歓声で迎えられました。

服部議員につづいて、大阪空襲裁判の原告代表安野輝子さんが挨拶しました。「私は6歳のとき、アメリカの爆撃機B29が落とした爆弾の破片で、左足を奪われました。それから65年、国からは謝罪も補償もなく、見捨てられてきました。このまま死んで

しまったら、孫・子の時代が心配です。是非日本政府に謝罪と補償をさせて、私たちも人権を取り戻したい。東京・重慶の人たちと一緒に、戦争の後始末をきちっとさせるようがんばっていきましょー」

一万雷の拍手です。翌日、重慶市の盧賢柏原告団長が、日本の空爆で父親が亡くなった場所などを案内してくれました。その折新聞記者に、加害国である日本から安野さんが参加していることについて質問を受け、次のように答えました。「卒直に言って日本国には恨みがある。しかし国民に恨みはない。両国の裁判の原告はどちらも被害者で、心がつながっています」と。盧さんは安野さんと、固い握手を交わしました。盧賢柏さんはその少し前に来日し、爆撃で父を殺され栄養失調で2歳の妹を失ったことを、東京地裁で陳述しました。翌日東京の原告団事務所を訪れ、共に闘うことを誓い合ったことは、みなさんもご存知でしょう。空襲被害を受けた中国人と日本人が交流するきっかけを作ったのは、2006年10月、東京からの重慶訪問でした。原告予定者4名に、弁護士2名、支援者を含めて20名が重慶爆撃の現地を訪れたのです。それ以来、東京でおこなわれる重慶・東京の裁判に、それぞれの原告と支援者が傍聴しあい、集会やデモにも参加してきました。すでに東京・大阪間は交流が盛んでしたが、あらためて東京・大阪・重慶の、3都交流の輪が形作られたのです。

言いかえれば、被害と加害の3つの裁判が、中国・日本の原告同士が交流しあい、励ましあって進行しているのです。今回の重慶裁判は、9月21日（水）午後3時30分、東京地裁103号法廷です。

2011年6月1日、重慶大爆撃訴訟支援の霞ヶ関デモ。先頭左が、爆撃で左腕を失った張開俊さんの娘・劉鳳蘭さん。原告の来日にあわせて毎回デモを行っている。



2010年12月26日、「6・5壁道惨案遺址」（空襲警報で全長2.5キロの防空洞に逃げ込んだ市民数千人が窒息死した記念碑）の前で、重慶大爆撃訴訟重慶市原告団長の盧賢柏さんと握手する、大阪空襲訴訟原告代表の安野輝子さん。

街の動き

浅見洋子詩集 『独りぼっちの人生』——東

京大空襲により心をこわされた子たち

（株）コールサック社刊。本体2000円十税。

本書は「第一章 独りぼっちの人生（せいかつ）

——六歳の智恵子」から「第六章 六六年目のおび

え——九歳の和子」まで、お一人を除いて東京大空

襲の原告で、幼くして親兄弟をなくし、戦後を生き

抜いてきた人生を法廷で証言するに当たり、事前に

膝つき合わせて彼女たちの心を開かせ話を聞くとい

う難しい作業をする夫の原田敬三弁護士に寄り添い

ながら耳を傾けた、詩人である著者の第8詩集です。

著者は現在ニッポン放送テレホン人生相談の回答者

もされており、全国空襲被害者連絡協議会の運動に

も積極的に携わっておられます。東京大空襲訴訟で

は、1番で12名、2番で4名の原告が法廷で証言し

ましたが、尋問を担当した弁護士の方のご苦心

の一端を知る上でも、ぜひ座右に置くか、或は最寄

の図書館にリクエストして取り寄せ、お読み頂きた

いとおすすめします。本書は遺族会・原告団事務所

でも取り扱っています。

「第一章 独りぼっちの人生——六歳の智恵子」の

「夕日」から、最初の一節をご紹介します。

——私は今でも夕日が嫌いです

語気を強め 言い切る 石川智恵子 六九歳

東京大空襲訴訟で 証人尋問にたつ 彼女

打ち合わせた場所を わが家にした 代理人の夫

二人の 傍らで 茶を入れながら

彼女の話に 聞き入った

第9回語り継ぐ東京大空襲

新宿戦争遺跡めぐりと平和学習会

6月12日（日）、「東京都平和祈念館（仮称）」

建設をすすめる会の主催で、第9回語り継ぐ東京大

空襲・新宿戦争遺跡めぐりと平和学習会が開かれま

した。午前9時半、都営大江戸線牛込柳町駅東口に

集合し、新宿区が昨年作成して無料配布している

『新宿区平和マップ』のコースに沿って「檜山ミュー

ジウム」の檜山紀雄氏が案内して下さいました。参

加者は27名。新宿区内は主として1945年4月13

日と5月25日の空襲で区内の9割を焼失したといわ

れています。中でも5月25日の大空襲で、早稲田

大学喜久井町キャンパス（理工学研究センター）地

下の大防空壕で300人を超える人々が亡くなった

といわれ、夏目坂上の感通寺には「喜久井町観音」

が建立されており、「造立縁起」には「昭和20年5

月25日、当町ヲ含メテ山手地区ハ米軍ノ空襲ヲ蒙リ、

悉皆灰燼ニ帰セリ。酸鼻ノ状タル死屍累々トシテ巷

ニ倒レ、残月白骨ヲ照シ遂ニ惨害シテ異物ト為スノ

観アリキ。殊ニ夏目坂台地ヨリ早稲田通りニ向ケテ

字型ニ構築セル地下壕ノ中ニ避難セル人々ハ爆撃炎

上ノ焰ト瓦斯ノタメ犠牲者参百有余名ヲコエタリト。

親ハ愛児ヲ抱キ若キ人老イタルヲ庇イ、夫ハ妻ヲ助

ケント為シタル等、或ハ全身大焼炭化シ、或ハ生ケ

ルガ如ク直立シ、或ハ両手ヲ虚空ニシテ落命セル等、

目ヲ蔽イ言ヲ失フ恐怖地獄ノ惨状ナリキ……」とあ

り、「町慰霊園」には89名の犠牲者のお名前が刻ま

れており、同一家族と思われる3名、5名と同じ苗

字の家が11家もあり、その惨状の一端が示されてい

ます。

また、早稲田大学記念会堂に隣接する国立感染症

研究所は戦時中、陸軍軍医学校があり、その跡地か

ら1989年に多数の人骨が発見され、731部隊

との関連も取沙汰されましたが、現在、その構内に

ある約3メートル四方の黒御影石の納骨施設（20

04年造立）には「静和」と刻まれ、「これらの死

没者の方々には心から弔意を表する」として、毎年厚

労省が拜礼式を行っているそうです。午後の平和学

習会では、新宿区内の老人クラブ会長の中陣正雄氏

が1945年5月25日の空襲体験を語られました。



矢野宏『空襲被害はなぜ国の責任か——大阪空襲訴訟・原告23人の訴え』せせらぎ出版発行。定価700円(税込み)

著者の矢野氏は大阪空襲訴訟を支える会代表で、全国空襲連の運営委員でもあります。本書は、2008年12月の大阪空襲訴訟原告団の提訴を受けて99年に出された『大阪空襲訴訟を知っていますか——置き去りにされた民間の戦争被害者』（せせらぎ出版、定価700円）の続編です。前書は「なぜ提訴するのか」などでしたが、本書では、「第1章 原告たちの訴え、第2章 避けられた空襲被害、第3章 大阪大空襲、第4章 全国空襲連」として、これまでの法廷での原告の訴えや弁護士が戦争損害受忍論を打破るためにどのような主張をしてきたか、さらに空襲被害者への補償をめざす立法運動についての報告などが書かれています。また、同時にDVD『大阪空襲訴訟原告たちの訴え』（本編34分、定価1500円）も発売中です。お問合せはどちらも、せせらぎ出版 TEL06・6357・6916 FAX06・6357・9279へ。遺族会事務所でも取り扱っています。

『続 表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記』定価900円(税込み)、B6版237ページ

1945年5月25日夜、B29約500機により、3月10日の大空襲の約2倍の焼夷弾で東京・山の手地域は港、新宿、渋谷各区を中心として焼き尽くされ、死者約3700人、負傷者約18000人とされる大きな被害を蒙りました。

08年に「表参道が燃えた日」編集委員会は港区青山、表参道付近を中心にその時の体験記を『表参道

が燃えた日』として発行、さらに翌年にその増補版を発行しました。このたびはその続編として、新たに37名の手記と、付録として、幼少期に疎開中に家族を空襲で亡くした方から、その遺体はどうなったかという質問が寄せられたことから、「遺体の行方——仮埋葬から慰霊堂へ」として詳述し、「戦後、国も都も空襲犠牲者の調査をして来なかった。首都東京には沖繩のような刻銘碑もない。平和祈念館も資料館も何もない」と指摘しています。

お問合せは、編集委員会。TEL・FAX03・3409・0371へ。

7・7 千葉市空襲66周年 戦争を繰り返さないための集い2011

7月7日千葉市文化センターで開催されました。これは「千葉市空襲と戦争を語る会」と「ちば・戦争体験を伝える会」が共催しました。

千葉市の空襲は昭和20年6月10日と7月7日です。七夕空襲と云いますが、900人以上の命が奪われました。千葉の被災者千葉みち子さんが、ところどころ自分の体験も織りまぜながら司会をし、千葉空襲の体験者4人と、東京大空襲訴訟原告の古家幾久江さんが語りました。

「伝える会」の市川さんが元教師稲葉正さんの体験を紙芝居にした「遺言 再び繰り返さないために」を上演しました。この会は、平和教育をしていた退職女教師の会が高齢化のため、その意志を継承し若い世代に伝える活動をしています。

「語る会」は記録集『千葉市大空襲とアジア太平洋戦争の記録100人の証言』の刊行を機に発足しま

した。この会は犠牲者名簿作成の運動を行っていて、情報提供を求めています。東京空襲犠牲者遺族会の河合（千葉市在住）からは、差別なき戦後補償を求める訴訟と立法化の運動について訴えました。

開催前に市の担当課や各紙の千葉支局に働きかけた結果、市政だよりに予定が載り、市長からのメッセージも届けられ、千葉市と千葉市教育委員会の後援を得ることが出来ました。他にも4団体の後援がありました。当日の参加者は予測を上回る100人超となりました。新聞各紙や千葉テレビ、日本テレビでも放映されました。

各地の小さな活動も連携して大きな力になるといいますね。（河合節子記）

千葉市は、1945年6月10日と7月7日に規模な空襲がありました。空襲があった場所は、6月10日は蘇我町、寒川町、新宿町、新田町、富士見町です。7月7日は市街地全域と椿森、作草部一帯の軍事施設です。次の5人の方が体験を語りました。

堤さん(男性)

1945年、工業学校機械科3年だったある日、白い布とカミソリと一緒に回状が回って来て、それは「1日も早く産業戦士にしてほしい」という血判状でした。子どもながらにお国のために役立ちたかったのです。7月7日はB29が124機千葉の空を覆い、一家10人がバラバラに逃げました。その時の惨状はひどいものでした。8月15日に天皇の一言で戦争が終わったのですが、もう半年前に戦争を終えると言ってくれていれば全国が焼け野原になることはなかったのです。

鶴本さん(女性)

私はNHKの「おひさま」の陽子と同一年の88歳

です。陽子と同じように小学校の先生になりました。勤労奉仕と勉強があべこべの毎日。農作業の手伝いを終えて農道で教科書を開いていた時、P51戦闘機の襲撃に遭いました。子ども達に木の陰に隠れて動かないようにと言いましたが、子ども達は心細くてみんなが先生の周りに集まって来てしまいましたが無事でした。もう戦争を起してはならないと、女教師たちが平和の活動を続けて来ました。

山中さん(男性)

その時本町小学校高等科2年生でした。学徒動員で6月4日に鉄道機関区に勤めました。6月10日機関区が空襲を受けた日は休みでした。親切に指導してくれた人は木っ端みじんになって亡くなりました。7月7日は、家は無事だったのですが、亥鼻山に登ってみて焼け野原になった街を見てびっくりしました。

中村さん(男性)

商業学校に入りましたが、途中で航空学校になり、14歳で飛行機の組み立て工場に動員されました。仕事でも、はじめは警戒警報で防空壕に入れてもらえましたが、爆撃が激しくなると、空襲警報でなければ入れてもらえなくなりました。6月10日は爆弾が落とされました。この日は千葉駅のところで空襲警報が鳴りましたが、防空壕に入らずに、松波の学校が安全かと思ひ必死に逃げました。疲れてもう走れないと思った時、爆風に遭い、畑の中に飛ばされました。眼球が飛び出さないように「目と耳を押さえる」という訓練をしていたので、助かりました。戦争が始まったらストップできません。起こさせないことが大事です。

古家さん(女性)

昭和8(1933)年生まれです。亀戸で父は鉄

工所をしていました。父が亡くなり母と姉、兄たちと北砂に引っ越し、昭和17(1942)年、私だけ甲府の叔母の所に疎開しました。3月10日の東京大空襲の夜は、甲府からも見えませんでした。怖くてなりませんでした。3日後に従兄に連れられて亀戸駅まで行き、家跡を探しました。電線に死体の一部がたっさんぶら下がっていて怖くてたまらなかつたけど、1日経つと馴れました。家の跡は大きなすり鉢状の穴が開いていて、端に母が使っていた鉄瓶と鉄の裁縫箱があり、我が家の跡だと分かりました。しばらくして全身やけどで甲府までたどり着いていた次兄は、25年間入院したまま亡くなりました。7月6日には甲府も空襲に遭って焼け出され、それからいとこ・はとこの家を転々として子守をして育ちました。栄養失調で死にかけたこともあります。学校で勉強することもできませんでした。

(「千葉市空襲と戦争を語る会」伊藤彰夫さんの「レポート」から一部転載させて頂きました。)

東京大空襲を考える 荒川の集い

8月6日、荒川区ムーブ町屋ハイビジョンルームで「東京大空襲を考える集い」が開かれ、約50名が参加しました。最初に東京大空襲訴訟原告団副団長の豊村美恵子さんが、家族4人を3月の東京大空襲で亡くし、ご自身も8月に艦載機による機銃掃射で右腕を失い、不自由な身体で苦難の人生を歩んできたが、今国に対し、謝罪と補償を求めて闘っていることを切々と訴えました。また、映画『お見捨てになるのですか——傷痕の民』(製作 クリエイティブ21)では、現在96歳になる杉山千佐子さんが議員立法による救済を求め続けている執念の闘いの姿が

映し出され、会場内は感動に胸打たれる人々の空気が満ち溢れました。(日暮里9条の会『あおぞら』より)

東日本大震災・大津波により釜石市戦災資料館の展示物のすべてを流失

「東京都平和祈念館(仮称)」建設をすすめる会の会報第22号によると、岩手県釜石市の、昨年8月9日にオープンした「釜石市戦災資料館」がこのたびの大震災と大津波で展示物のすべてを流失してしまつた由。釜石市は1945年7月14日と8月9日に米海軍の機動部隊による艦砲射撃と艦載機による機銃掃射により、街は焼野原となり、釜石製鉄所を中心として死者は700人とも1000人ともいわれています。また、朝日新聞(2011年8月16日)によると、釜石市で8月9日に毎年開かれている戦没者追悼式は、今年は参列者が150人ほどで例年の半分だった。その中で、戦争の記憶を震災で流すことは出来ないかと、再び資料集めを始めた人がいると報じています。

2011(平成23年)9月15日
編集発行 東京空襲犠牲者遺族会
事務局 東京都墨田区押上1の33の4の102
電話 03(3616)2338
編集部 榎本喜久治 大竹正春 川島博久
斎藤亘弘 永尾寿孝 西沢俊次
山司勝紀 山本唯人
写真 高橋陽子 根本徳三 鷺頭一男